

久しぶりのアジアの旅だ。  
クメールの大地に初めて立った。  
この風、この土、河の色。不思議  
に共通する香りがある。

今日は、そこに、クメールの華  
とも呼ばれるアンコール・ワット  
が、居る。一二世紀の初めから、  
ずっと、ここに、居る。

アンコールとは王朝、ワットと  
は寺……。つまり、ここは『王朝  
の寺院』か。ヒズー教寺院とし  
て建立されながら、そのち上座  
部(小乗)仏教が伝わり、仏教寺  
院へと衣替え。宗教闘争も、王家  
の争いも、八〇〇歳を過ぎた今世  
紀のつい二〇年ほど前もクメール・  
ルージュの銃弾を受けたりしなが  
ら、私たち人間のやることを、た  
だ、じっと見つめてきた。

いかにして、この地球が生まれ  
たのかを語る、天地創造神話『乳  
海攪拌』。そして『ラーマーヤナ』  
『マハーバーラタ』……。壮大なる  
物語と人々への教えを、幾重にも  
取り囲む回廊の壁に刻みつけて、  
その中心に神の住む須弥山として  
の塔がそびえ立つ。地上の極楽浄  
土。

撰氏四〇度。紫外線が肌に痛い。  
一九世紀末、この巨大な遺跡を  
世に知らしめたのは、フランスの  
アンリ・ムオーだった。以後、こ  
の極東にあるクメール文化遺跡の  
保存復興はフランスのイニシアテ

イブで進められてきたという。  
おそらく八〇〇年の昔とはとん  
ど変わらぬ姿であろう僧侶たちが、  
通り過ぎていく。  
蓮の花が、参道脇で、揺れてい  
る。

一二世紀を目前にして、ようやく、  
この巨大な遺跡を、人類の共  
通の財産として大切に保存しよう  
という動きがでてきた、と聞いて  
ほっとした。

アンコール・ワット  
修復まであと一〇〇年

アンコール・ワットを北に数キ  
ロ行くと、アンコール・トムがあ  
る。今回の旅で、私が最も好きに  
なった遺跡である。

つくられた時は、全部で三三〇  
以上はあったであろうといわれる  
観音菩薩の顔が、四方を見下ろし  
ている。人々は『パイヨンの微笑  
み』と呼び、その優しいまなざし  
に、そっと合掌する。

その北経蔵を、今、JSA(日  
本国政府アンコール遺跡救済チー  
ム)が修復中と聞いて、訪ねた。  
現地スタッフ五、六名ごとに、  
日本人が一人ついている。炎天下、  
ただひたすら、黙々と作業が続く。  
何千いや何万個あるだろう。ガ  
ラガラと崩れ、あるいは壊された  
石塊があたり一面に広がっている。  
風雪(いや雪は降らないから風雷  
かしらん)に耐えきれなかった石  
もあれば、人為的に滅茶滅茶に破  
壊されたものもある。もちろん盗

アンコール・ワット西参道脇の聖  
池から見た夕景。訪れる人もまば  
らになった頃、暫しの間、いにし  
えの静けさ。

# 「アンコール遺跡」 悠久の時間が刻まれた クメールの造形美



12世紀、クメールの王たちが宗教観に従って造営した巨大建造物は、いずれも独創性に富み、優れた造形は見る者を魅了する。

文 野中ともよ

まれたり、原因の分からない損傷も数多くある。

「修復といっても、ただ壊れているのをくつつけて、補強して見栄えをよくするだけなら、どんなに楽チンでしょうかね」

JSA所長の成田剛さんは、笑う。曰く、その遺跡の現況をまず克明に記録する。そしてどの時代、どんな材料でどのようにしてつくられたのか。そして、どうして損壊したのかなどの学術調査研究をし、そのうえでどの時代のどの様式で修復するかを決めなければ、修復とは呼べないのですよ、とのこと。

たしかにそうだ。でも、何万何百万個の石造寺院だ。一体、復興にはどれくらい時間か？

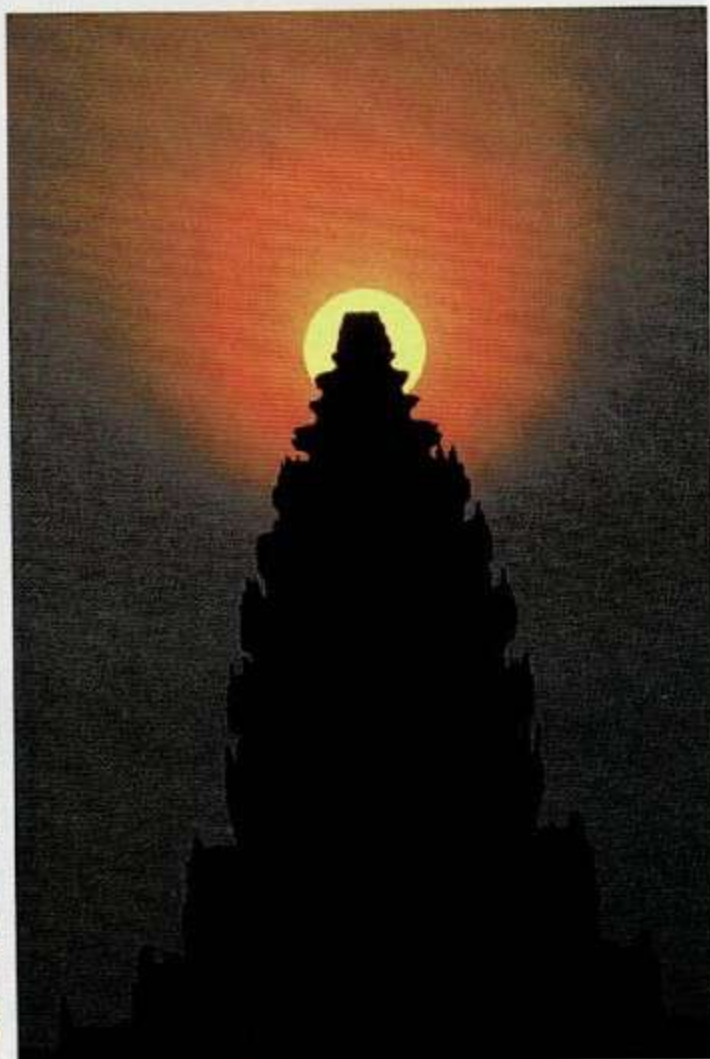
「ウン……そうですね、あと五〇いや一〇〇年くらいあれば、カタチになってくるかもしれませんがね」

真顔で答えられてから、すこうし笑った。

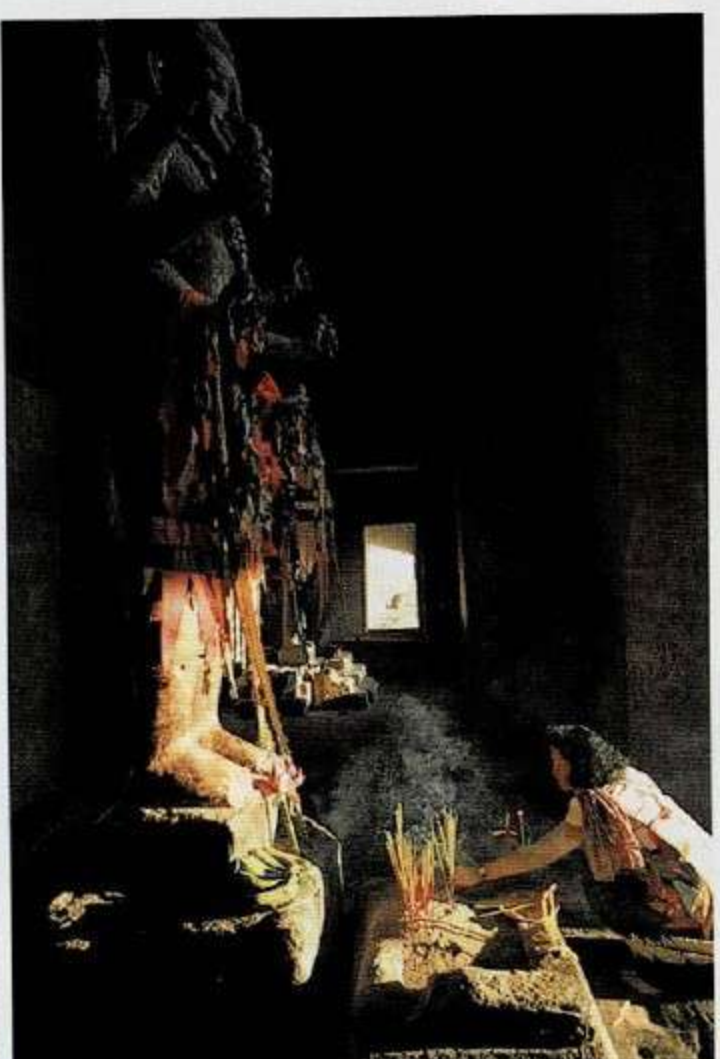
なんとも、気の遠くなるような世界である。

分秒単位に一喜一憂し、ストレスをためている自分の時間軸が、コッパミジンに爆死した。

これまでの修復リーダー国のフランスチームは、見えない部分にコンクリートや鉄骨を使って補強し、できるだけ速く鑑賞に耐えるモノをつくるというノウハウとか。インド隊、インドネシア隊等、各々に全く異なったポリシーやノ



(中段右) 春分の日、暗いうちから西参道で日の出を待つ。午前6時前、太陽は中央祠堂の真後ろから昇った。



(中段中) 西門の脇にはシノ神が安置されている。時折、敬虔な信者が訪れて、香を薫き、神に願うている。

(中段左) シノ神の像の前に供えられた蓮の花。像の前には信者が手に向けた心づくしの花が絶えず、人々の信仰の厚さを物語る。



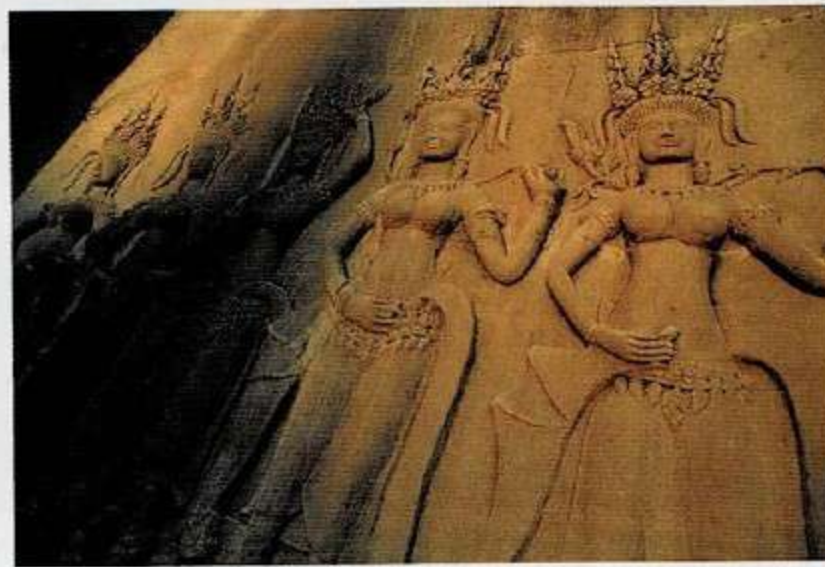
(右ページ) 上空から見たアンコール・ワット。1986年に政府の協力で撮影されたもの。今では境内の上を飛ぶことはできない。

(左) アンコール・ワットは今でも、カンボジア人の誇りであり、心の拠り所である。吉日には、ここで結婚式を挙げるカップルが多い。



踊りの伴奏も、クメール王朝以来の伝統を今日に伝えている。

アンコール・ワットの回廊に刻まれたアプサラ。その優雅な物腰と微笑みは、人々を魅了する。



春分の日、西に面した基段では、ヒンズーの教えとともにインドから伝来したラーマーヤナの物語を基にした踊りが披露された。



ウハウでやってきた修復作業の今後の国際協力は前途多難？  
「一番大切なことは、とにかく、現地の人たちが、自らの手で、自らの文化財を修復し、民族の誇りを取り戻せるように、いかに僕らが役に立てるか、ということなんだと思いますよ」と答えてくださったのはJSA団長で早稲田大学教授の中川武さん。

### 戦争で疲れた人々に希望と誇りを

キョッキョツ、キョロロン……中国の胡弓のような音色が、バイヨン中に響き渡った。地雷で両足を失った男性が弾いていた。

思えば、この地では、三〇〇万人ともいわれる大虐殺が行われてから、また一〇年もたっていない。そのボル・ポト派は、立場こそ「反政府組織」扱いになったが、つい三年前までは国際会議においても、当事者としての位置にあったのである。

想像をはるかに超える貧しさ(GDP一人当たり二二六USドル)のなか、国民の九割近くが農民ということも考えると、まだまだ安定した「和平」状況が続く、とはいえない。

お金やインフラ援助というかたちでなされてきた経済援助(ODA)のあり方が、問い直され始めたが、こうしてカンボジアの地を歩いてみると、遺跡の復興という「文化交流」のカテゴリーに括られていたプロジェクトが素晴らしい経済援助にもなり得るという気がしてきた。八〇名近いJSAの現地スタッフは皆、農民だ。

「このプロジェクトのおかげで安定した収入を確保でき、しかも、日本チームはノウハウを教えてくれるのでワクワクしながら、立派

てくれたサムさん。

生活する力と、希望と、誇り——戦禍に疲れ果てたカンボジアの人々にとって、今、必要な援助は、これなのかもしれない。  
胡弓がやんだ。ピタリと、時も佇んだ。  
バイヨンの頬を、相変わらず、クメールの風が撫でていく。☐

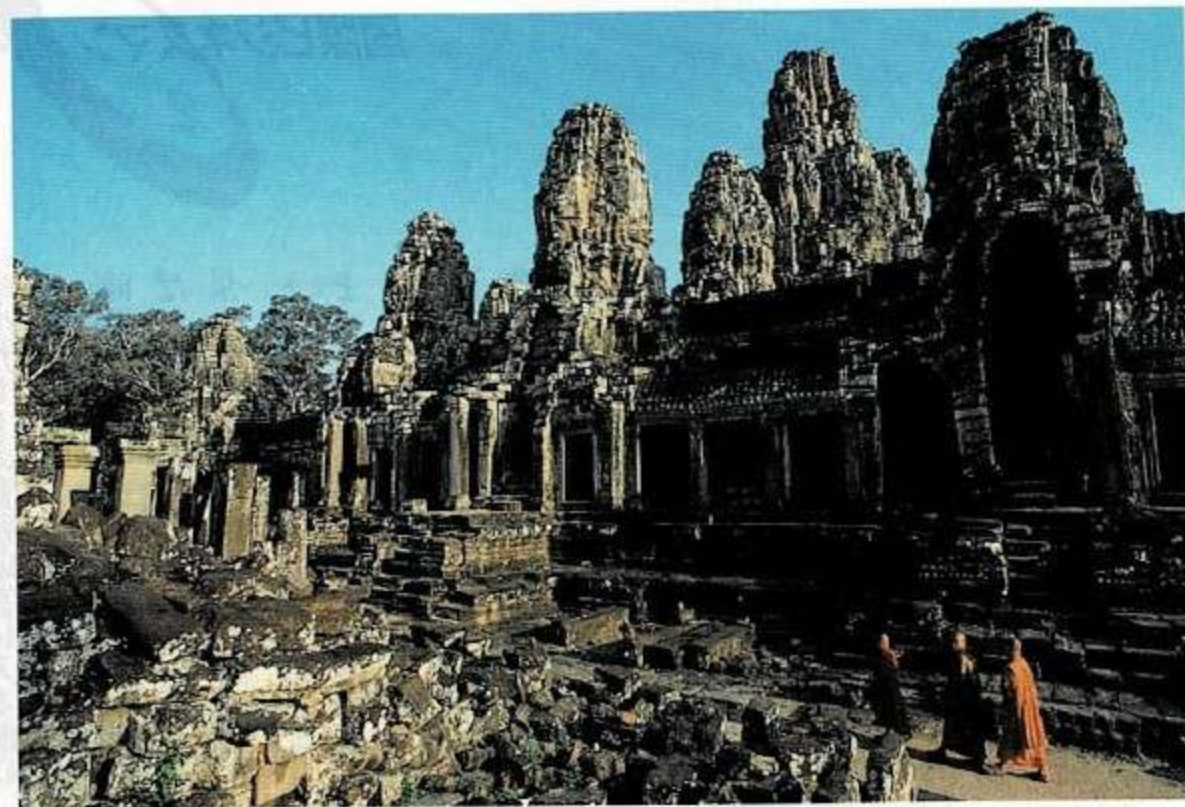


アンコール・トムにほど近いタ・プロムの境内には、巨大なガジュマルが生い茂り、堅牢な建物を圧しているが、この寺院だけは自然の摂理に任されている。

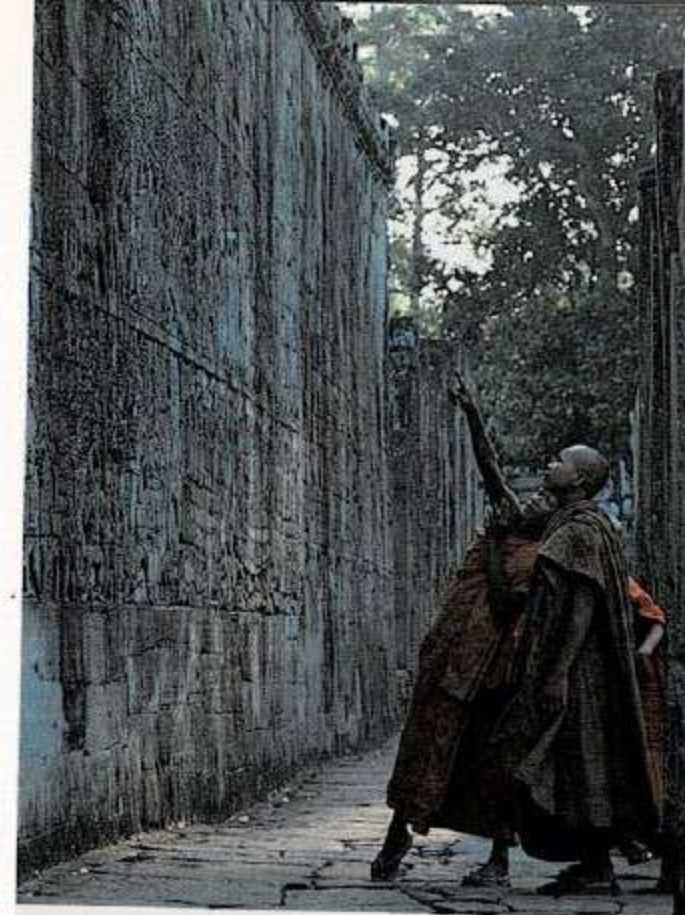
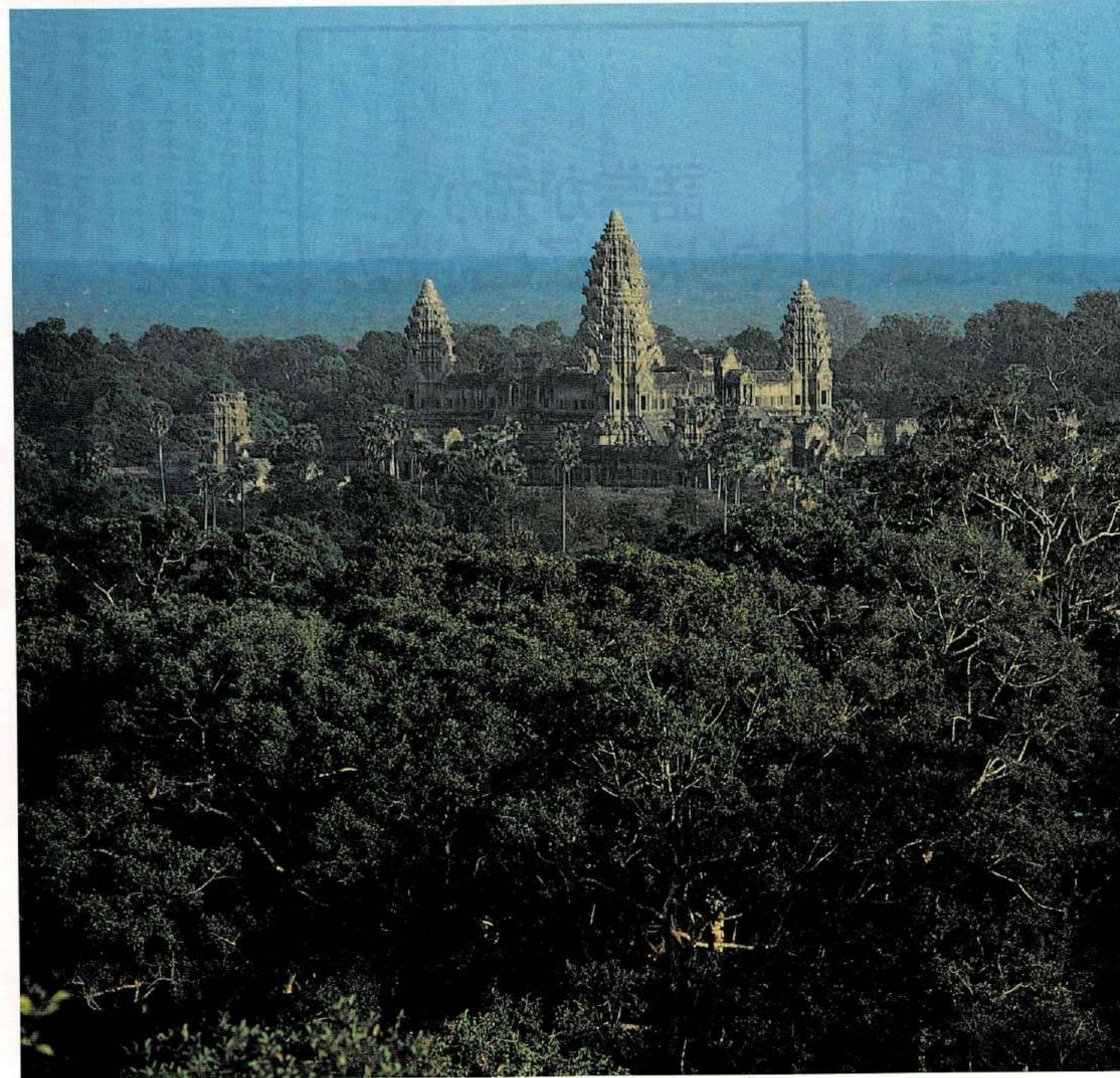
西に面した回廊では、アプサラ(天女)の衣装を身に纏った少女が、踊りの出番を待っていた。



(右上) 4面に菩薩像を刻んだ仏塔が林立するバイヨン。  
(上) 日本の援助で行われている修復現場を訪れた野中さん。



プノン・バケンの遺跡から見た、クメール芸術の最高峰アンコール・ワットの全貌。



(左) アンコール・トムの中心、バイヨンは周囲に回廊を巡らせている。そこには蓮の葉の上で踊るアプサラや戦闘の場面などが刻まれている。

(右上) アンコール・トムで、フランスの修復チームが新たに発見した回廊。未完成のままに置かれた彫像もある。  
(右下) アンコール・トム南大門に架かる橋には、左右に54体の彫像が並び、写真は左側にある神々の像。

